

2021. Winter  
Study & Training  
Quarterly Report

MEISHO Co.,Ltd

# CareManager

足立エリア / 足立区、荒川区の各施設  
江戸川エリア / 江戸川区、墨田区、新宿区、文京区の各施設  
埼玉エリア / 埼玉県、千葉県各施設  
居宅エリア / サービス付き高齢者向け住宅の全部、一般在宅  
(ガーデンフィールズシリーズ ほか)

【コロナ禍におけるケアマネの気づき】令和2年を振り返ると、コロナに始まりコロナに終わった1年でした。私がコロナ禍で体験したいくつかのケースをお話しします。面会制限がかかるとあるご家族から「防護服を着てもいいのでお部屋に行かせてください」と申し出がありました。今まで面会時にタンスの中の整理などを行っていたとの事でした。ご家族がご入居様ご本人の生活を気に留めていただいていたことを痛感しました。また、あるご家族は、毎週日曜日に外食をしたり買い物をしたりと外へ連れて出かけていましたが、刺激がなくなり認知症が進行してしまうのではないかと大変心配されていました。そして毎日食事介助に来苑されていたご家族は、要介護5のご本人を自宅へ連れて帰りました。これもコロナの影響で、面会制限が長く続き今後の見通しが立っていない状況下で施設にいたら会えないと判断されたようです。このような体験からご家族の愛情を強く感じ、ケアマネとしてできる事は、現在のご本人様のご様子など細かい情報や感染対策をこまめに伝え、ご家族に安心して預けていられると感じていただける事だと思います。そして、今後の課題として、新型コロナウイルスとインフルエンザの違いや肺炎についても研鑽を積みしたいと思います。これからも感染対策に心がけ、1日も早く通常の日常が戻ってくる事を切に願っています。 大宮明生苑

SAITAMA Area  
KYOTAKU Area

【令和2年の振り返り】

昨年1年間は新型コロナウイルスの猛威により、生活が一変し新たな生活様式となってきました。そんな中でも利用者の生活を保持していく為、各サービス事業者は手探りの中、工夫をされ感染対策を徹底しておりました。居宅でも感染拡大を防止する為、対策を行っていましたが、各サービス事業所や施設と比べると普段から感染対策の実技・演習といった事を行っていなかった為、いざガウンテクニックやしつかりとした手洗いの方法などがわからなかったりと反省をする場面が多くみられました。利用者に対しても、利用しているサービス事業所で新型コロナウイルス陽性者が出た際、サービスが利用出来なくなった場面でのどのように行動をしていくのか、代替えサービスをどうするか等、考える事が多くありました。昨年1年間は世界的に大変な年ではありましたが、いろいろな事を学ぶ事、体験が出来た貴重な1年でした。この1年間に学んだ事を今後の業務に生かしていきたいと思っております。

めいしょう居宅介護支援事業所

## 新しい年の始まりに向けて

新しい年を迎え、皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。さて、令和3年の今年も三年に一度の介護報酬改定が行われる年です。ちなみに、介護保険法改正は五年毎、診療報酬改正は二年毎に行われます。昨年は介護保険制度開始以来、新型コロナウイルスによる未曾有の事態となり、介護事業は多大な影響を受けました。また北海道の老人保健施設で発生したクラスターの混乱からもわかるように医療と介護各々の役割の重要性を再認識させられる出来事もありました。この様な状況を踏まえ、どのような介護報酬改定となるのでしょうか。

### コロナ禍での介護報酬改定

新しい年を迎え、皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。さて、令和3年の今年も三年に一度の介護報酬改定が行われる年です。ちなみに、介護保険法改正は五年毎、診療報酬改正は二年毎に行われます。昨年は介護保険制度開始以来、新型コロナウイルスによる未曾有の事態となり、介護事業は多大な影響を受けました。また北海道の老人保健施設で発生したクラスターの混乱からもわかるように医療と介護各々の役割の重要性を再認識させられる出来事もありました。この様な状況を踏まえ、どのような介護報酬改定となるのでしょうか。

社会保障審議会介護給付費分科会より昨年十二月二十三日に発出された令和3年度介護報酬改定に関する審議報告(案)に、介護報酬改定に関する基本的な考え方では、①感染症と災害への対応力強化、②地域包括ケアシステム推進、③自立支援・重度化防止④人材確保・介護現場の革新、⑤制度の安定と持続となつていきます。これらで特筆すべきは①と④でしょう。①は感染症や地震・水害などの災害発生時においても事業を継続するための計画を具体的に求められています。これは消防計画や災害時の対応マニュアルとは別に事業継続計画(BCP)の作成が義務付けられ、その計画に則った職員への研修、訓練の実施が必要となります。また、感染症の発生と蔓延防止に対する取組の徹底が求められ、委員会開催、指針整備、研修実施、訓練が義務付けられます。(これらには経過措置三年が設けられる予定です)④の人材確保は恒久的な課題になりつつあり国も喫緊かつ重要な課題として位置づけています。これに連動して、介護サービスの質を確保した上でテクノロジーの活用や基準の緩和を通じた業務効率化・負担軽減を推進することになっていきます。具体的には介護現場のIT化などを求めています。以上は全サービスを対象としており、今回の改定の柱となる部分です。

### 編集後記

とある小学校の給食の時間：机は授業中と同様に全員黒板に向かっ(一ひつ)の机は離れている。生徒児童は一言も発せず黙々と食事をしていく。食事が終わると直ちにマスクをつけ後片付けを始める。私が小学生の頃は、机を班ごとに向かい合わせにして、色々と雑談しながら前に座る子供の顔を見て楽しんで食事していた記憶がある。自分としては大変楽しい時間でも何かに開放されるような時間だった。しかし、現在はコロナ禍でその様子も大変変わったのだろう。いや、変わらざるを得なかったという方が正しいか。ある意味この異様な光景を皆さんはどのように感じるか？お行儀が良くて宜しいと感じるか？いやたぶんそうではないだろう。教育の場とはいえ、少々窮屈な感じに思ってしまう。しかし、コロナ禍での感染予防対策としてはかなりしっかり行っているのだと思う。子供たちなりに学校の中とはいえ、精一杯自分たちでできることを行っているとも思える。我々大人たちは少なからず子供たちより高い倫理観を持ちあらゆるメディアより仕入れた情報から自分が取るべき行動に気付くことができる。いや、気付かなくてはいけないのだ。そしてまた、子供たちはその大人たちの背中を見ているのだ。学校の行事も中止がちとなり、楽しいはずの夏休みもメディアで先か、我慢を強いられているのは大人たちだけではないのだ。しかし、一部の大人たちは、何かと理由をつけては飲みに出かけ普段と何ら変わらない生活を送っている輩もいるように聞く。経済が先か？感染防止対策が先か？これは「卵が先か鶏が先か」の議論でもなろう。ひとつ言えることは決して「木を見て森を見ず」とならぬよう注意が必要だ。 西岡

2020年は手さぐりで試行錯誤を重ねながら未知のウイルス(新型コロナウイルス感染症)との戦いの一年となってしまいました。生活様式はがらりと変化し今後も日常での感染予防を主眼とした生活様式が求められています。高齢者施設でも大きなイベントの中止、家族面会や外出の制限、自粛等により入居者様が社会と接する機会をことごとく制限せざるを得ない状況となりました。それゆえ多くの方にADLや認知機能の低下が見られ認知症の悪化等も話題となっています。認知症の方は環境の変化に大変敏感であり症状が急に深まる事も考えられます。マスク、フェースシールドを着用した職員を見て驚いた顔をされた入居者様もいらっしゃいました。外出、大きな声で話す事、歌う事も制限され入居者様も大きなストレスを感じている様子です。英国医療調査会社によると日常が日本に戻るのにはワクチン接種の出遅れが響き2022年4月と発表されました。私達ケアマネはコロナ禍という特別な状況が入居者様にどのような影響を及ぼしているのか丁寧にアセスメントしプランに繋げる必要があると思います。まだまだ続くこの戦いを感染予防の徹底を行い、変わりゆくセオリーに目を向けながら入居者様の気持ちに寄り添い「今が楽しい」と感じて頂けるよう仲間と知恵を絞り考えながら乗り越えて行きたいと思っています。 グループホーム竹

ADACHI Area  
EDOGAWA Area

介護保険法の施行から昨年で20年が経ち、団塊の世代がすべて後期高齢者となる「2025年問題」よりも早くに新型コロナウイルスの問題で、医療・介護の世界が一変した年でもありました。私自身、日頃より入居者様のプラン作成をする際に最大の理念としてきたのは、人間としての尊厳保持や自由でしたが、新しい考え方が必要だと感じました。これまでは、ご家族様にも頻回の面会をお願いする事で、入居者様の安心感や施設との信頼関係を築く事ができたのですが、感染防止対策としての面会制限や集団レクなどを中止せざるを得ない状況になり、これまでは多くの人と関わる事で精神的活性を得ていた入居者様でしたが、コロナ禍では人との距離を置いたり、マスクを常に着けたりと日常的变化が顕著となりました。ご家族様も「感染を防ぐ為家族も外出を控えたい。しばらくは施設に行かない事で父や母が安全に暮らせる。」という思いや、「このまま会えなくなると家族の事を忘れてしまうのでは？」との訴えには、本当に悩みました。ガラス越しの面会でも喜ぶ入居者様やご家族様の姿を見ると、ケアマネとして何かできる事は無いかと常に考えさせられました。このようなコロナ禍の状況で、今だからこそケアマネの専門性を発揮し、見えないものを見る力、声なき声を聴く力が必要だと痛感させられました。 篠崎明生苑